

まちなみ通信(みのお)

発行：NPO みのお市民まちなみ会議 第51号 2014年3月

箕面の山のみどりとまちなかのみどり

片岡 正彦

朝日新聞朝刊「ひととき」欄(平成25年12月6日)に、箕面市在住の高校生・中村友美さんの投稿が載っていました。一部を引用します。「私の住むまちは景色がとともきれい。登下校時に見える山の木々の葉は日に日に赤く染まり、冬になるにつれて空気が澄んで、空がぐんぐん高くなっていく。毎日景色を見るのが楽しみ。私はこのまちが好き。・・・」



箕面の山なみが好きという人は、箕面住民の大多数を占めるといっても過言ではないと思います。箕面市に住むようになった理由のトップは、「自然の山々が近くにあり、自然環境がよいから」で(平成21年市民満足度調査・箕面市)、また、「山間・山麓部のみどりを守っていくべき」は、市民全体の98%を占めるというデータもあります。(平成6年箕面市民意識調査・箕面市)

このような市民意識を受けて、箕面市では、十数年前からこの大事な山なみを守るために、いろいろな施策を行ってきています。市街地から見える山麓部の景観を守ることを目的として、平成10年に、「山なみ景観保全地区」を指定、開発に一定の歯止めをかけることになりました。平成14年には、山麓部の有効活用を図るため、「山麓保全アクションプログラム」が策定され、その実行部隊の支援組織である「NPO法人山麓保全委員会」が発足、平成16年には、市民の活動資金のバックアップのために、「公益信託みのお山麓保全ファンド(2億円)」が創設されました。しかしその後山麓部と市街地の間に20階の高層マンションが建設され、そのほかさまざまな開発計画が持ち上がってきました。それらの事態に対処するために、平成22年、山なみ景観保全地区と市街地平坦部との間にある山すそ部分に「山すそ景観保全地区」を指定、景観法に基づきこの地区の大型の建設行為には、形や色などが背後の山なみ景観と調和しているかのチェックを行なえるようになりました。

また、行政のみならず箕面の山のみどりの保全や活用に関しては、NPO法人山麓保全委員会を中心に、30団体を超える多くの市民団体(山林所有者を含む)が、山の掃除ハイク、間伐、散策路の整備、ナラ枯れ調査、自然観察、森の音楽会等々、ファンドを利用しながらさまざまな活発な活動を行っています。

箕面市には、「みどりの基本計画」（平成16年、平成23年改訂）が策定されています。この基本計画には、「山なみに抱かれ、みどり豊かなまち・みのお」を目指すことを謳われており、山なみ景観だけでなく、まちなかのみどりの充実をどう進めるかも論じられています。都市生活の中でのみどりの効果は多様な側面がありますが、季節感のあるみどり豊かな風景は、住民の誰にとっても魅力的であるということは間違いのないでしょう。

箕面は市街地のすぐそばに山があるので、みどりが多いと感じるが、まちなかのみどりは、さほどでもないと言う人がいます。さてまちなかのみどりはどうなのでしょう。

みどりの量を示すデータとして「緑被率」という言葉があります。緑被率とは「樹林・樹木などに被われた地域の面積の割合」をいいます。左表は近隣市との緑被率を比較した

緑被率の比較（平成14年）

市町村	全 域 %	市街化区域%
箕面市	62.2	14.9
豊中市	13.7	13.7
大阪市	6.5	6.9
大阪府	9.9	9.2

表です。箕面市全域の緑被率が6割を超えるのは、半分近くが山ということを示しています。大阪市と比べれば、みどりが多いのは自明ですが、お隣の豊中市よりも、ややみどりが多いかなと言えるのではないのでしょうか。

（みどりの基本計画改訂版より）

他方、人が好感を持つ豊かなみどりを感じるのは、視界に入るみどりの割合であるという研究（平成17年 国土交通省）から、「緑視率」という尺度を取り上げる自治体が、近年急速に増えてきました。大阪府は、平成25年に、「緑視率調査ガイドライン」を作成、まちなかの緑化推進の指標として使うよう促しています。みのお市民まちなみ会議では、箕面市全域（山を除く区域）から166地点を選び、緑視率を算出しました。全市平均で22.5%という結果でした。（まちなみ通信・みのお 48号 25年3月参照）、国土交通省の調査では、緑視率が25%を超えると、人はみどりを豊かに感じ満足度が上がると述べられており、箕面のまちなかのみどりは、もうひと踏ん張りということでしょうか。

〔参考〕緑視率の調査は東京都が一番進んでおり、千代田区 37.6%、杉並区 20.8%、墨田区 19.5%、江東区 18.1%、港区 18.1%、中野区 17.9%といったデータ（各区のHPから）が発表されています。近隣市では、池田市のみで、17.8%です。

箕面市では、山のみどりの保全活動が先行して行われてきましたが、平成20年代に入り、まちなかのみどりに関心が高まり、平成22年、箕面市のそれぞれ別の制度で行っていた活動支援を統合して「まちなかのみどり支援事業」ができ、まちなかのみどりを増やす市民活動や地域住民への助成として「みどり支援基金（7.9億円）」が創設されました。平成24年には、「まちなかのみどりアクションプラン」が、「NPO花とみどりの街づくり・箕面」により策定されています。

まちなかのみどりは、玄関周りの花、生垣、庭木など各家を飾る「民」のみどりから、公園、街路樹などの「公」のみどりまで、非常に幅広い分野が含まれます。「まちなかの豊かなみどり」とは何を目指すのか、価値観が多様な現代社会においては難しい課題ですが、住みやすく愛着の持てるまちを夢見て、一歩ずつみんなで努力を続けたいものです。

箕面で一番早く桜が咲いた !!

箕面中央の河津桜が満開となった。立体駐車場脇に、どんな経緯で植えられたのか判らないが、毎年、箕面で最も早く花を咲かせ、春の訪れを告げている。箕面には市内各所に桜の名所が在る。市道オケ原線の桜のトンネル、紅葉丘住宅、千里川堤、箕面公園、その他の公園、学校の校庭、そして上止々呂美、箕面の山などの山桜、中央線の枝垂れ桜、八重桜をしんがりに、次々に花やかに咲き誇ります。しかし、多くは花時が短く満開となったと思ったら、アッと云う間に花吹雪です。

河津桜は、静岡県河津町(伊豆半島の下田市の隣町)で、昭和 30 年(1955)に偶然発見されたことに由来し、当初は発見者の飯田氏の屋号から「小峰桜」と呼ばれていたが、その後の学術調査で、大島桜と寒緋桜の自然交雑種と推定され、昭和 49 年(1974)河津桜と命名された。1月下旬から2月にかけて開花する早咲きの桜で、花の色は桃色ないし淡紅色で、桜の代表格の染井吉野よりも色が濃く、花の期間も1ヶ月と長い特徴がある。

河津町では、昭和 43 年ごろより増殖が行われ、現在では街中を流れる河津川に沿って、3kmの河津桜並木が続き、毎年桜祭りが開催されて、多くの観光客で賑わい、河津町の名前が有名となり、伊豆の小さな町の町おこしに寄与している。筆者は2月5日に河津町を訪れたが、今年は殆ど花は見られなかった。

河津桜が有名になるにしたがって、全国に移植され各地で早咲きの花が愛でられている。

ところで、箕面中央の立体駐車場は、市民期待の北大阪急行鉄道が間もなく延伸工事(千里中央より新御堂筋を北進)を始め、箕面中央駅(仮称)となるでしょう。折角毎年美しい花を咲かせてきた、此の河津桜は、どのようになるのか心配です。



※※※※ 小学校と街のつながり ※※※※※※※※ 第六回 北小学校 ※※※※

とんがり屋根の時計台が青空に映え、校庭ではサッカーボール、ドッジボールが飛び交い、一輪車を巧みに操る児童など、元気な声があふれています。箕面市に20校の小中学校(とどろみの森学園、彩都の丘学園を含む)がありますが、とんがり屋根の時計台の校舎は箕面北小学校しか在りません。紐とけば、船会社経営の岸本兼太郎氏が大正9年(1920)頃より、箕面駅の東、巡礼道から山裾の田畑を住宅開発(箕面住宅)しました。一番山手を松原通(北

小の南側の通り)、次の通りに桜を植えて桜通り(バス通り)、さらに細い通りをもみじ通り、巡礼道を梅の通りと名付け、整然とした住宅街であり、建物は変わりましたが現在も街並みは全く変わっていません。その街づくりの中心施設として、大正15年箕面学園尋常小学校(現箕面自由学園)が開校しました。校舎は三角屋根にステンドグラスの窓や飾り外灯の超モダンなものでした。太平洋戦争が激しくなり、学園は箕面村に売却され、昭和20年4月北小学校が開校されました。



新年度から、北小学校の教育の根幹となる学校教育目標等を見直し、「他者を意識し、お互いを認め合い、助け合える子どもの育成」を学校教育理念とし、☆自ら考え、他者のために行動できる子ども ☆支え合い、励まし合い、学び合う子ども ☆誠実で、ねばり強く、感謝の気持ちを持てる子ども をめざす子ども像として、学校教育目標を「個を生かし、支えあう学校」☆美しく、静かで、安心できる学校 と掲げ、教職員が協力・協働して児童の育成に取り組んでいけます。

学校の歴史や地域の様子などは、3,4年生になって副読本などで本格的に教えていますが、低学年では芦原公園、唐池公園、箕面公園など四季折々に公園探検して地域になじみ、商店街や店舗を訪れて地域の人々の生活を学ぶなど、児童の生活圏が箕面駅を中心で、商業施設や中央図書館、消防署、警察署、郵便局、銀行、病院など公共施設も多く、旧い神社、寺院も在り、箕面市発展の起点であることを、成長に伴って感じているようです。

児童の自慢は、とんがり屋根の校舎と校庭の大楠です。幹に耳を付けて木の音を聴き、みんなで手を伸ばして太さを測ったりしています。運動会の練習では木陰が休憩場所で大切にしています。また秋の天狗祭には、学校に天狗が訪れて児童たちを喜ばせて呉れるのも地域の伝統行事に親しむ機会となっています。

曾祖父母、祖父母、親、子と同じ学校で学ぶ、長い歴史と伝統。地域全体で見守る中で、児童は日々成長を続けています。 (宮崎校長先生のお話他から)

※※※※ 小学校と街のつながり ※※※※※※※※ 第六回 北小学校 ※※※※

松山 喬

— 中の坂 —

箕面で生まれ、育ち、今も箕面に住んでいる。平尾の道標から西江寺に到る坂道・中の坂で育ったが、結婚後は箕面四丁目に住んでいた。10年余前からまた中の坂の元の家に戻り現在に至っている。

中の坂は、箕面の瀧や瀧安寺へ通じる古い歴史のある道で、道幅の狭い急な坂道であるが、古くから家が建ち並んでいた。

坂道のため、各家は石垣で築かれた土地に建っていて、道の両側に石垣が続いているという景色は、私が子供の頃と少しも変わっていない。



しかし、坂の上辺りにあった畑地が開発されて新しい住宅群が建った。以前の道は、通行する中央部が簡易舗装でその両側は地道であったが、いつの頃からか全面舗装された。そして、坂道の途中に駐車場もいくつか造られ車の通行も多くなってきた。これらが中の坂の変化といえるだろう。

中の坂というと西江寺(聖天宮)の秋祭り(当時は10月25日・26日)、今でいう天狗祭が頭に浮かぶ。

現在は、夜間だけの楽しみだが、子供の頃は、昼間も天狗やかぐら(獅子舞)が境内から出て、中の坂や駅前の広場や瀧道を子供や通行人を追いかけて走り回り、追いかける方も必死に逃げたものだった。

また、境内には屋台店がぎっしり並びそれは賑やかであった。さらに、大太鼓の重々しい余韻のある響きは、祭りの雰囲気盛り上げた。

秋祭りは、子供達にとっての楽しみの一つでもあった。

坂の上の生活は、何かと不便なことも多いが、駅にも近く、150メートルほど歩けば森と水に恵まれた自然豊かな箕面国定公園にも入って行ける。

眺望もよし。坂道の上り・下りは足腰が鍛えられるなど前向きに考え、残り少ない人生も中の坂で・・・。

しかし一方、急な坂道での生活は、一年一年身体にこたえていくことを覚悟して。